

健康とその戦略

■生命の循環を提唱■

～7～



石井 正三氏

最悪想定し準備を

自然守る行為は普段の努力

夏にはあれほど酷かったコロナ禍第五波が、潮が引くように静かになってきた。

防疫の基本は、国境を閉じ、出入り口を限定して経過観察期間を置くこと。海に囲まれた幸運にも恵まれて、国民による高いレベルの自発的対応でオリパラの二律背反的な運営を乗り切ったの小康状態だ。改めて良い国だと実感する。

それでも、まだ樂觀はしない方がよい。獲得した免疫を持つていても、ウイルスにさらされる時間と量に圧倒されれば感染防止に限界はあるし、死亡率が減っても感染が再燃して後遺症が残つてしまえば残念なことだ。二回のワクチン接種まで進み、三回目に入っている欧米の国々でオミクロン株の感染数が多くなっている。

ウイルスの変異は、やがて

は弱毒化の方向に向かつていくという経験則はあるが、一つの国で落ち着きが見えても、別な国や地域から変異形が流入して新たな感染の輪が立ち上がってしまうば元の木阿弥。世界を巻き込むパンデミックの難しさがそこにある。

いきがい村が受賞

日本政府は、インフルエンザワクチンの接種を開始して、その上で治療薬がまだ確立されていないコロナウイルスに対してワクチンの三回目接種を推進しようとしている。

発熱した人々が不安に駆られて、医療機関に殺到するよくな混乱は何とか避けたいから、直近のこの冬をどんなふうに乗り切ることができるかは極めて重要。そして、最悪

の想定をしながら準備する姿勢こそが、災害対応の基本なのだ。

ちょうどコロナ禍の第五波が下火になった時期の十月二十二日。海の見える丘公園にある、県立神奈川近代文学館で行われた日本ビオトープ協会in横浜2021で、全国六カ所の一つとして、医療法人社団正風会／老健施設いきがい村（小浜町地内）の「いきがい村里山ビオトープ」活動が審査委員長賞を拝受した。

敷地およそ四町歩の自然林を保護しながら、二十年以上運営をしている実績が推薦されて対象になった。昨年からコロナ禍で見送られたので、この二年間で全国六事業受賞というのはかなりの狭き門だったと言えるだろう。

ビオトープとは、一九七三年、ノーベル賞を受賞した生物学者コンラート・ローレンツ博士が、一つの水槽の中でいくつもの生物が互いに共存して命を繋ぐことができる状況をさした概念。

つまり、現代的な輪廻思想

のような生命の循環を提唱したことによる。

類人猿から初期の人類は緑の高層アパートの樹上生活を楽しんで来た。二足歩行から地上に下り立ち、集団の社会的活動を創ってきたものの、緑なす自然に包まれた心地好さはいまだに深層心理に保たれている。自然を守る行為は普段の努力の積み重ねとその継続が必要だが、逆に自然破壊はほんの一瞬で起こってしまう。

自然とともに過ごす時間を楽しみ、生きた森の気配や香りに直接触れて季節の変化も楽しむ空間を実現するには、工事の冒頭から樹木を伐採せず枝切りに留める。どうしても必要なら、移植するという大方針を理解して協力いただいた鹿島建設や関係者の努力、そして職員の継続的協力のおかげと感謝している。

日本の戦後高度成長を造り出し、それを支えた世代が高齢化を迎えている。

黒潮と親潮が出合う潮目の海として豊穡であり、人間社会も東北地方の南端で関東圏との人脈や歴史も様々にある

のと同様、いわきの自然は北限と南限、そして山岳系と海浜の植生が混在し、多様性に富んでいる癒やしの空間なのだ。

日本では古来、ヒトと自然

が一定の距離感を保ちながらその相互作用で維持される「里山」という概念が、開発か自然保護かという二項対立ではなく伝承されてきた。そこには、現在から未来に向けてSDGs（持続可能な開



緑があふれる小浜町地内の自然林の中に建設された、老健施設の「いきがい村」。敷地内には「極早生みかん」も植えられており、日に日に色づく風情が関係者の目を楽しませている。二〇二一年十二月初旬

破壊はほんの 一瞬で終わる 未来に向けSDGsを实践

がある。ワシントンDCポトマック川へ日本から桜並木の寄贈に尽力されたエリザ・シドモア (Elizabeth Scidmore) さんの墓所があり、坂の下にはもう一度USから里帰りした桜と案内板が静かに寄り添っている。

十一月十九日には、「限りなく皆既に近い月食」があった。日が暮れてすぐに満月が欠けたので、ご覧になった方々も多いと思われる。何年前か前には皆既日食を観察したこともある。

三位一体的な世界観

天文学上では、あれほど質量も性状も違う太陽と月に地球がかかわり、「太陽―地球―月」の並びで太陽光を遮られて月が隠れる月食となり、そして「太陽―月―地球」と並んで、月に光を遮られた太陽が日食となる。

それぞれが地球から見たときに同じ大きさに重なるのは、誠に不思議なことだ。

古代人が太陽神である天照

大神と月読尊を姉弟とし、天上から地球上(現世)、そして、あの世(隠り世)を縦横に駆け巡る素戔嗚尊をもう一人の神として敬い、神話に語り継いだのは、この三つの存在がこの世のダイナミックな変化を直接的に生み出しているという、日本的でしかも三位一体的な世界観と見えなくもない。

確率論的な宇宙の中で、何とも稀有なバランスが保たれているとの思いを想起させられる天体ショーだった。

筆者プロフィール

石井 正三

(いしい・まさみ)

地域医療連携推進法人医療戦略研究所 所長・代表理事、長崎大学客員教授、ハートバード公衆衛生大学院名誉武見フェロー、東日本国際大学健康社会戦略研究所 所長・客員教授、医療法人社団正風会理事長

